

こどもの病気対策法^{⑫②}

ーインフルエンザー

大分大学客員教授 是 松 聖 悟

毎年冬に流行するインフルエンザですが、今年は流行の立ち上がりが早いようです。咳やくしゃみで感染し、潜伏期は平均2日です。症状は悪寒、頭痛、高熱、咳、鼻汁、嘔吐、下痢などで、合併症として、肺炎、脳症、中耳炎、心筋炎、筋炎などがあります。特に乳幼児、高齢者が重症化しやすいとされています。

鼻の中を綿棒で拭て行う検査がありますが、発熱初日にはインフルエンザにかかっていても陰性となることが多く、翌日以降も、約4割の人は何度検査を繰り返しても陽性になりません。つまり、検査陰性でもインフルエンザは否定できないのです。複数回の検査は健康保険で認められませんので、検査結果よりも医師の診断を優先してください。

複数の抗インフルエンザウイルス薬がありますが、熱が下がるまでの期間を平均1日短くするものの、他人に感染させる期間は短くならず、重症化の予防としても十分では

ないとされています。また、強い解熱薬は、インフルエンザ脳症を合併した場合の死亡率を高めます。そのため、薬は最低限の使用にとどめ、十分な安静と栄養と睡眠をとってください。

以前、10歳代を中心とした飛び降りや異常行動が報告され、ある薬の副作用が疑われたことがありました。しかし、その後の調査で、他の薬でも、または薬を何も飲まなくても異常行動が生じることがわかりました。つまりインフルエンザそのものの症状であるのです。また、1歳代ではなく10歳未満の報告が最も多いこともわかりました。このため、子どもに対しては発熱から数日は注意深く観察してください。

このように、検査にも薬にも限界があります。一方、ワクチンは、発症予防としては弱いものの、重症化予防になるとされています。うがい、手洗いに加え、ワクチンで重症化を予防しましょう。

インフルエンザの5つのポイント

- ・ 咳、くしゃみで感染し、高熱などを来す。
- ・ 約4割は検査しても陽性にならない。
- ・ 抗インフルエンザ薬は発熱期間を短くするが、他人に感染させる期間は短くならず、重症化予防としても十分でない。
- ・ 強い解熱薬は脳症合併時の死亡率を高める。
- ・ ワクチンは重症化予防となる。

